



オザドフカ村（移住者の村）診療所に朗報！！

= 診療所の移転支援が決まりました =

「予算不足で、自分の国からも見捨てられてしまったようなこの時代に、遠い外国（日本）からの支援が、本当に自分達の村まで届くとは、思ってもみませんでした…。」

チェルノブイリ事故後、たくさんの被災者が移り込んだオザドフカ村の診療所に、外務省「草の根無償支援プログラム」による医療機器や医薬品が届けられた時、村人達は異口同音に感謝の言葉を述べました。

そして、今またこの村に支援が始まろうとしています。手狭で改修が必要となっている同診療所を、かつてコルホーズが使用していた建物に移転する計画が、外務省に承認されたのです。

実は、最初にこのアイデアが持ち上がった時、この建物は心ない地元の誰かによって、ひどく荒らされていました。（ドアや暖房のラジエーターが盗まれ、窓ガラスも割られていたそうです。）それを見た、我が「キリチャンスキーさん」は、「まず、これを元通りに改修しなければ、申請の手助けはしない！」と、叱りつけたというエピソードがあります。

住民からカンパを集めたり、自分達の手で、今ある診療所の改修を行ったりと、自立の姿勢が生まれてきたことも、交付決定の背景にあったのかも知れません。

費用は、全部で 228,033 グリヴナ（約 540 万円）。3月 15 日に「草の根・人間の安全保障無償資金協力」の贈与契約に署名式が行われました。

このポレーシュが届くころには、春の雪解けとともに、既に、工事が始まっているかも知れませんね。

(J)

〒466-0822 名古屋市昭和区楽園町137 1-10

チエルノブイリ救援・中部 代表：市原佳代

郵便振替：00880-7-108610

TEL/FAX：052-836-1073 (月・水・金 10:00~17:00)

E-mail : chachubu@muc.biglobe.ne.jp

ホームページ : <http://www.chernobyl-chubu-jp.org>



<オザドフカ村診療所の所長さん>

スタディ・ツアーアの企画が具体的にまとまりました。

「切尔ノブイリ事故 20 周年」となる今年は、市民団体により「写真展」や「コンサート」「シンポジウム」などが、日本各地で開催されます。

あと 1 ヶ月となりました、4 回目となる救援・中部企画のスタディ・ツアーアでも、現地ジトーミルで開催される「キャンドルセレモニー」(25 日)、「祈念式典」(26 日) に、参加を予定しています。

帰国後の 5 月 14 日(日)には、YWCA で開催される「切尔ノブイリ 20 周年写真展 in 名古屋」(p9 参照)で報告会を予定しています。

月日(曜日)	旅 行 ス ケ ジ ュ ー ル
4月 23 日(日)	中部国際空港(セントラル)発 フランクフルト着(マイツル泊)
4月 24 日(月)	フランクフルト発 キエフ/ボリスブルク空港着 大使館の催しに参加
4月 25 日(火)	切尔ノブイリ博物館見学 キエフ発 ゲトミルヘ キャンドル・セレモニー
4月 26 日(水)	切尔ノブイリ 20 周年祈念式典参加(消防局前記念碑前/児童画展挨拶)
4月 27 日(木)	支援施設の訪問(ナロドチ方面) ボトヌィツヤ村で診療所/学校/ナロドチ消防署/公園/博物館/ナロドチ地区病院/行政見学/帰路にゲオリー・クリシ村の教会
4月 28 日(金)	支援施設の訪問(ゼレムリヤ方面) ゼレムリヤ診療所/グルニク診療所/ノヴォグラード・ウオリソスキ市(レーシャ・ウクライナ博物館)
4月 29 日(土)	日本・ウクライナ市民交流デー (オープニングセレモニー/写真展/1グリバ・ナ・バザール/ウクライナの子どもの歌など)
4月 30 日(日)	ゲトミルを出発 キエフ着 キエフ市内観光(聖ワフヤ寺院他…ユネスコ世界遺産など)
5月 1 日(月)	キエフ発 フランクフルト着(フランクフルト泊)
5月 2 日(火)	フランクフルト発
5月 3 日(水)	名古屋/中部国際空港(セントラル)着

また救援物資を船便で送ります！

しばらく途絶えていた救援物資の船便をまた送ることになりました。

荷物は、昨年のクリスマス会で静岡サレジオ小学校の子どもたちから頂いた新品の車椅子 2 台と、中古車椅子 10 台、それに超音波診断装置(中古 1 台)、血液中の酸素濃度を測るパルスオキシメーター(2 台)、使い捨て注射器多数など、時価にして約 450 万円です。送り先はジトーミル市立小児病院。車椅子は事故処理作業で障害者になった方々や、障害をもって生まれた子どもたちに贈られます。

事務所で中古の車椅子の錆落しをこつこつやりながら、この車椅子はどんな人が使ったんだろう…とか、この人は足が後ろに曲がってしまう癖があったようだ、とか、この後からつけた魔法瓶入れば、ご家族が暖かいコーヒーでも入れて散歩に連れ出した際に使ったんだろうか…等と想像し、ウクライナで新たな障害者のお役に立つことを願っていました。船便は 4 月中に送られる予定です。

(K)

ウクライナ料理講座に参加して<2月14日>

奥村 志保

ウクライナという国は、日本人にとっては馴染みが薄いかも知れませんが、私は、幸運にも以前よりお友達がいました。しかし、まさかお料理を習う事ができるとは夢にも思わず、私自身、興味津々の参加でした。

料理を作り始める段階でも、見たことも聞いたこともないような材料があり、作れるかしら?と、ちょっと不安にも…。



ボルシチというのは、私の中ではどこか日本のビーフシチューに似ていると思っていたが、ウクライナ風ボルシチはトマトベースで、ビーツという大根のような野菜と一緒に煮る事によって、赤い色のスープになる事が判り、納得!! それから、日本料理は一般的に醤油がベースで、何かと醤油・みりん・砂糖を使う場合が多いのですが、ボルシチを作る際には、塩の量で味の変化がもたらされる事もポイントの一つ。同じ料理を作っているはずが、ビタリー先生と私達の出来上がりの味の違いに苦笑!!

普段から料理を作り慣れていない私を、日本語が堪能で冗談を言って楽しく教えてくださったビタリー先生と、御一緒した方々が、何かと助けてくださったおかげで、完成したボルシチは美味しく、私にとっては最高の出来映えと、感激!!

正直、温野菜が苦手な私でしたが、今回の数々のウクライナ料理のおかげで、キャベツをゆでるとこんなに甘く美味しいくなる事も味わい、今後の私の食生活に大きな変化をもたらしてくれる事でしょう。また、「ウクライナ料理は、日本人にとても馴染める料理である」と思いました。

これからは、今回の講座を生かして、和・洋・中だけでなく、ウクライナ料理も作り楽しむとともに、このような交流を通じて、もっともっと日本とウクライナの関係が深く築かれていく事を願っています。最後に、お世話になりましたありがとうございました。

《チェルノブイリ事故20年チャリティー・バザー》も大盛況

去る3月4日、中小企業センターにて「中部よつ葉会」との共催で、チャリティー・バザーを行いました。開場前から60人以上が列をつくり、「よつ葉のバザーは人気がある」との前評判どおり、



飛びように売っていました。「救援・中部」のコーナーでも、今静かなブームの“東欧グッズ”を求めて、大勢の方が訪れてくださいました。河田さんと、なごや民間大使のビタリーさんのミニ講演会も、多くの方が熱心に聴講され、メモをとる姿もちらほらと。

この日の収益金は、441,791円。全額が、ナロジチの2つの村の水道ポンプ修理費に充てられます。ご協力ありがとうございました。

総会& チェル救デーのお知らせ

来る6月10日(土)、あいちNPOプラザB室(地下鉄名城線「市役所」駅下車、徒歩3分)にて午後1時半より、チェルノブイリ救援・中部の「定期総会& チェル救デー」を開催いたします。詳細は次号に掲載いたしますのでお楽しみに。

2005年度奨学生決定！

報告が遅くなりましたが、今年度新規奨学生は、14名に決定しました。

医科短大4名、農業大5名、国立大（旧教育大）5名です。現在の奨学生32名と新規奨学生14名の計46名に奨学生が給付されます。また、奨学生は今まで一人20ドル/月でしたが、インフレの悪化、諸物価の上昇に伴い、25ドル/月に変更されました。

今年度の奨学生決定については、ホステージ基金と多くのやり取りが行われました。経済的困窮度の高い、かつジトーミル在住の事故処理作業者及び放射能汚染区域に住む住民の子で、成績優秀、より強い向学心のある学生を選考基準とすること、各大学2年生から採用の再確認がなされました。（医大のみ1年生から採用）なお、05年の卒業生は12名です。（山盛）

新規奨学生の作文を紹介します。



＜医科短大生 オリガ・ヴィクトリヴァ・オレクシチュクさんの文章（一部掲載）＞

1986年4月26日、多くの人々の人生を決定的に変えた出来事が起こりました。 Chernobyl原発の爆発は、明るい未来への希望を奪い去ってしまいました。

その頃、私はまだ生まれていませんでした。事故後間もない時期には、「黒い雲」が自分たちに近づいているなどとは誰も夢にも思っていませんでした。人々は働き、子どもたちを育て、生活を続けていましたが、放射線は近づき、目に見えない覆いで一人一人をくるみ、私たちが望むか望まないかを問うことなく、人々を自らの支配の下に置いたのです。

事故後数日経って、村議会の職員たちが農家を一軒ずつ訪れ、井戸をポリエチレンの布で覆うよう指導し、畑の野菜・ベリー・キノコを食べることや牛乳を飲むことを禁止しました。事故後3日目には、家の入り口に濡れたマットを置くように指示されました。なぜでしょう？

人々が真実を知ったのは、もっと後になってからでした。災いが起きたのであり、それは私たちを見逃してはくれませんでした。大地は放射線で汚染され、放射線は静かに、無言で人々を連れ去っています。

私は、そのような悲劇が起こっているさなかに生まれたのでした。出生後、生体機能と免疫の状態を安定させるため、私は点滴を受けました。黄疸もありました。母は、母乳を与えることを許可されなかったため、とてもつらい思いをしました。私は治療を受けたものの、それは余病の併発を伴っていました。子どもの時から今に至るまで、私は呼吸器疾患にかかりやすく、常に急性気管支炎や扁桃腺炎に罹っています。

母は2年後に妹を生みました。妹が3歳の時、視力検査で、両眼とも強い近視であることがわかりました。ニーナは子どもの時から眼鏡をかけています。2003年、彼女の視力は急激に落ち始め、手術が必要になりました。両親は親戚にお金を借り、ニーナは州立小児病院で手術を受けました。幸いに視力は安定し、それ以上悪化はしていません。もし手術をしなかったら、失明していたかもしれません。

放射線の影響は両親にも及びました。母は、卵巣の悪性腫瘍がみつかり、手術が必要だと言われました。母も手術を受け、手術は成功しました。

父の健康も悪化しました。彼も、私と同じように、急性の呼吸器疾患に罹りやすいです。

しかし、この悲劇にもかかわらず、私たちは明るい未来を信じ続けてきました。そして、よりよい暮らしができるようになることを願っています。私たちは互いに愛し合っており、そのことが私たちの人生の道での困難を克服する助けになります。私たちは生きていますし、それが一番大事なことです。将来はすべて私たち自身の努力と夢に左右されるのです……。

名古屋国際センター：ウクライナ紹介講座

第37代なごや民間大使ベレジヌイ・ビタリーさんが企画した紹介講座です。

古くて新しい国ウクライナを講演や、料理講座を通して紹介します。また、ウクライナ伝統のピーサンキ作りも体験してみませんか。

申し込みお問合せ：**4月25日(火) 9時より、先着順で電話予約** (052-581-3755)

	日時	場所	講師	テーマ・内容	参加費	定員
1	5月13日(土) 14:00～ 16:00	名古屋国際センタ-/別棟ホール	チエルノブイリ救援・ 中部/河田昌東	【ウクライナの人々と文化】 チエルノブイリ原発事故被災者 者の救援活動をしている講師 が、ウクライナの人々との交 流を通して見るウクライナの 魅力を紹介します。	800円 (賛助会員 :400円)	100人
2	5月20日(土) 13:30～ 15:30	東生涯学習セカ-/料理室	ウクライナ人主婦/ 中島ナデージダ	【家庭料理教室お菓子編】 ウクライナの家庭でよく作ら れるお菓子を作ってみましょ う。	800円 (賛助会員 :400円)	36人
3	5月20日(土) 17:00～ 20:00	東生涯学習セカ-/料理室	ウクライナ人主婦/ 中島ナデージダ	【家庭料理教室ディナー編】 ボルシチの発祥地、ウクライ ナの家庭でよく食べられてい る夕食を紹介します。本場の ボルシチなど、身近にある材 料で作ってみましょう。	1,500円 (賛助会員 :800円)	36人
4	5月27日(土) 12:30～ 14:30	名古屋国際セカ-/別棟ホール	東京大学大学院 総合文化研究科 地域文化研究専 攻ウクライナ研究者/ 栗原典子	【歴史で見るウクライナ】 9世紀から22世紀、キエフ 公国からオレンジ革命までの 波乱に満ちたウクライナ史の 魅力と歴史的建造物、教会、 要塞などの観光名所、民族文化 を紹介します。	800円 (賛助会員 :400円)	100人
5	5月27日(土) 15:00～ 16:30	名古屋国際セカ-/別棟ホール	東京大学大学院 総合文化研究科 地域文化研究専 攻ウクライナ研究者/ 栗原典子	【体験:ピーサンキつくり】 キリストが登場する前からあ る卵に色や絵を着けて装飾す るウクライナ独特の伝統に触 れ、実際にイースターエッグ (ピーサンキ) を作ってみま しょう。	1,000円 (賛助会員 :500円)	50人

*都合により講師やスケジュール等の変更がある場合があります。ご了承ください。

2006年2月代表団報告

(2月6日~8日)

今回は、キエフ国立大学で1年間ウクライナ語を学ぶためキエフに来たばかりの運営委員戸村京子と、ウクライナ駐在員の竹内高明の2名が代表団メンバーとなり、ジトーミル市滞在も2泊3日の短いものでしたが、「切尔ノブイリの人質たち」基金(以下「ホステージ基金」と略す)との話し合いを中心に、予定を無事終えることができました。その主な内容をご報告します。

1. ホステージ基金との話し合い

<2006年度予算について>

a. 3団体への医薬品支援

これまで医薬品支援を行ってきた3つの被災者団体(「切尔ノブイリの消防士たち」、切尔ノブイリ障害者支援基金、「リクヴィダートル[事故処理作業者]」)のメンバーには、ジトーミル州の民間健康保険組合に加入していただき、組合では提供されない高価な医薬品について「救援・中部」が支援するということで合意しました。これは、自助努力を促すとともに、「救援・中部」の支援がより効果的に用いられるることを願っての措置です。国の健康保険制度が未だ整わない中で、ジトーミル州の民間健康保険組合の制度はある意味で試験的なものですが、それを生かしつつ「救援・中部」の支援がよりいっそう役立つことを期待しました。

b. 奨学金の対象にナロジチ地区の枠を設ける

ホステージ基金代表のキリチャンスキーさんは、ナロジチ地区の診療所支援プロジェクトを日本国外務省の「草の根無償支援プログラム」に申請するにあたって、同地区内の診療所をすべて視察しました。その結果、ガスが引かれておらず、零下20℃の冷え込みの中でも暖房がないという診療所があっただけでなく、診療所のスタッフが定員を満たしていないケースが5件あることがわかったとのこと。ウクライナの法律では、人口1,000人以上の村には、最低准医師が1人はいなければならぬことになっているのですが、給料が安く仕事が大変なため、診療所で働く希望者がおらず、スタッフの老齢化が進んでいるというのが、村落部一般での問題です。汚染地域でその傾向に拍車がかかっているとしても全く不思議ではありません。そこで、ナロジチ地区からジトーミル医学短大に入学する人、あるいはジトーミル市の国立農業・生態学大学で、汚染地域の農業や林業の研究に携わる人材を、「救援・中部」の奨学生として養成、卒業後これらの診療所や地区内の林業企業体などで働いてもらってはどうか、という提案が出されました。

<スタディ・ツアーについて>

日程、経費、宿泊先などについて話し合いました。今回、日本からの持参物品のチャリティ・バザールを予定しているので、物品の見本を見てもらい、適正価格を相談しました。

<今後のナロジチ地区支援プロジェクトについて>

「救援・中部」側の用意した支援プランをホステージ基金に説明、意見を求めました。汚染された土壤の改良などについては、「ジトーミル農業・生態学大学でも研究はされているものの、研究成果を実地に生かすには困難がある」との話。エネルギーの自主生産プロジェクトについても、「ウクライナではまだなじみが薄く、地区行政の反応がどうだろうか」ということでした。今後さらに説明を加え、意見交換をして、実現の可能性を探っていく必要がありそうです。

2. 非常事態省ジトーミル州支局医療センターの見学

事故処理作業者の消防士たちや、汚染地域で働く消防



士たちとその家族の定期的健康診断を専門に行う施設を作りたい、という話は、「切尔ノブイリの消防士たち」代表チュマクさんから以前より聞いていました。一般的検診センターでは検査料がかかり、また場合によっては何日も検査の順番待ちをしなければならないため、汚染地域からジトーミル市に検査に来る消防士たちには特に負担が大きいのです。そのせいで、病気につかっても詳細な検査を受けるのが遅れ、病状が進行してしまう。40代で亡くなっていくことが多い事故処理作業者たちの命を救い、また汚染地域で働く消防士たちの被曝線量をチェック・記録して、健康管理ができるようにしたい……との話でした。例えば、ナロジチ地区消防署長のクラフチュクさんは、甲状腺の検査のため、年4回キエフに行かなければならないということです。



しかし、非常事態省から予算が出て、ついにジトーミル市内に医療センターができ、切尔ノブイリ事故の記念日である4月26日までには開所の運びとのことで、市内の集合住宅の1階にあるそのセンターを見学しました。家具や機器はまだ入っていませんでしたが、内装は週末に消防士たちが自らボランティアで行ったということで、壁やドアなどきれいになっていました。資材は非常事態省の見つけたスポンサーから提供された由。内科・外科・耳鼻咽喉科・眼科・神経病科・精神科があり、スタッフの俸給と家賃・公共料金は非常事態省から支出されるそうですが、必要な検査機器、特に甲状腺や心臓の検査に用いる超音波診断器、その他内視鏡などの機器の購入予算はありません。これに対して、「草の根無償支援プログラム」に申請するか、「救援・中部」の資金で支援するか、検討してもらいたいとのことでした。チュマクさん、センター長のガリーナ医師、非常事態省ジトーミル支局のギルゴフスキー局長らは、努力の結果ついに活動を始めようとしているこのセンターに、希望を託そうとしている様子がうかがえました。

3. ジトーミル州立小児病院血液腫瘍センター見学

ホステージ基金が「切尔ノブイリの1グリヴァ」キャンペーンの支援対象としている同センターで、カタログハウス社の「切尔ノブイリの母子支援基金」の支援により、ドイツ製の血漿成分分離機が導入されました。以前「救援・中部」の招待で、日本での研修を受けた同センターの主任医師チュムトさんの案内で、この機器を見せていただきました。センターの医師がキエフの専門病院で研修を受け、白血病の患児に末梢血幹細胞移植を行うことが可能になったということです。(後日、すでに最初の移植が行われたとの報告がホステージ基金からありました)この時、同院の各セクションのプレイ・ルームを見学しましたが、「救援・中部」から送られたクリスマス・カードが壁にかざられており、日本からの支援については教育係の先生から子どもたちに話されている様子でした。ホステージ基金から、プレイ・ルーム用の絵本やクイズの本なども寄贈されました。それぞれのセクションの患児の状態に応じて、プレイ・ルームにも工夫がなされているようでした。

このように、今回は代表団としてはごく短期間の現地視察でしたが、個々の支援対象について新しい眼でより詳しく情報を得る必要もあるのではないかと感じました。切尔ノブイリ事故20周年という時期にあたり、日本の各マス・メディアの記者がジトーミルをも訪れていますが、その一人に同行した竹内から見て、被災者の状況に新たな視線が注がれることが、救援についてもプラスの意義をもたらすのではないかという気がします。特に、ナロジチ地区の消防士たちが、今も汚染地域の火災時に高度の被曝を強いられ、それに対して実質的になんらの補償もない(年金支給年齢の計算について、汚染地域での就業年数が一般の1.5倍に計算されること以外は)という事実は、日本の記者たちにとって耳新しい事実のようでした。

(竹内高明)

今回より、ご存知ポレーシュ編集子、戸村京子さんの連載が始まります。
今年2月から10ヵ月間の、キエフ大学での留学生活を語ってもらいます。

キエフ留学日記（その1—真冬編） 戸村京子

＜キエフ到着＞

2月2日に慌しく日本出発、ソウル・モスクワ経由でキエフ到着が3日夜。モスクワの空港で、京都で同じ大学の脇坂君と合流。10回目のウクライナでもあり、1年間の留学に対してあまり不安はありませんでしたが、ボリスピリ空港には、留学先のキエフ大学から、前に名古屋大学に留学していたマリヤさんが出迎えてくれ、そしてキエフ駐在 Chernihiv 救メンバー竹内高明さんの顔も見え、やはり心強く感じました。

外はマイナス十数度の寒気の中、深夜に大学の寮に着き、受付で仮登録、4階の自室に入りました。きれいとは言えないけれど、京都で住んでいたワンルームより広く、クーフニヤ（キッチン）、バンナ・キムナータ（バス・ルーム）、トゥアリエート（トイレ）、ベッド（なぜか2つ）、机、テレビ・冷蔵庫（ともに古い）などがあります。

なるべく居心地良くするため、ベッドなどを模様替えし、トイレマット、スタンドなどの初期投資（？）。ベッドが寝返りの度に異様にギシギシ鳴り、目が覚めるのが困るぐらいで、あとはノルマリノ（正常・問題ない）。

＜2月訪問団＞

出発前の運営委員会で、経費節減のため「今回の訪問団は、ちょうどキエフに行く戸村とキエフ在住の竹内さん」という次第に…。2人の訪問団は、6日早朝、頬が凍りつく中、バスセンターからジトーミルへ向け出発しました。

日本からの訪問団は、いつも時間の制約から慌しいのですが、今回は、ホステージ基金事務所でキリチャンスキーさんたちとゆっくり・じっくり・和やかに話し合えてよかったです（6~7ページの報告を参照してください）。

ジェーニヤさんから、「必要でしょ？」とソーセージ・チーズ・バターをおみやげにもらって、ありがとうございました。

＜キエフ大学での授業＞

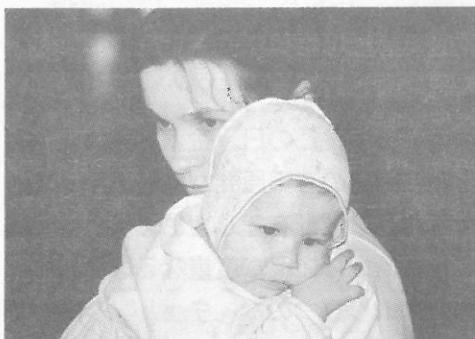
キエフ大学は、赤い建物と黄色の建物などが街中に点在し、通りを挟んだ「シェフチェンコ公園」にある、ウクライナの国民的詩人シェフチェンコの像を眺めながら毎日通っています。

授業を受けるにあたり、「日本からの学生が全員揃わないと手続きが出来ない」などと言われ、いまだ種々事務手続きに関しては非能率的。何事も「期待しない、希望する」が合言葉です。ウクライナ語・ロシア語の授業開始からほぼ1ヶ月、宿題もあり。

昼間の気温はマイナス1~3度、今日も細かな雪降り。街中は3月26日の最高議選の終盤で、各政党の旗が人びとに盛んにアピールしています。



チェルノブイリ20周年写真展 in 名古屋／5月10日(水)～14日(日)



＜血液の異常を診断された子とその母
ベラルーシ(1996)＞

榎本恭子

「救援・中部」は「広河隆一非核平和写真展開催を支援する会」の宮西さんの呼びかけに応え、「エコ・アクションなごや」「DAYS JAPAN サポーターズクラブ名古屋」とともに、報道写真家広河隆一さんの写真展開催（会場：名古屋 YWCA）に協力することとなりました。

月1回の準備会では、「救援・中部」とは違う顔ぶれ・違う熱さで、しかし同じ目的をもって、「多くの人に足を運んでもらうにはどうすればいいか？」を思案中です。

この20年、日本でも原発の非安全性や放射能の恐怖は身をもって経験しているはずなのに、私たち国民の声は届かず、行政は懲りることを知りません。

○ 原発テロが起きたときのための避難訓練まで行われるようになった今、事故が現実のものとなったらどうなってしまうのか、チェルノブイリの被災者の写真を前に今一度自分の問題として捉え、「今、そしてこれから」について一緒に考えてみませんか？

100余点の広河さんの写真が一度に見られるこの機会、彼の平和への思い、被災者の苦悩をも汲みとて、あなたの言葉にして伝え続けてくだされば、彼らの心も癒されることでしょう。

スタディー・ツアーの報告会もあります。ぜひご来場の上、感想などをお聞かせください。

－「ホピの予言」完成20年記念・チェルノブイリ原発事故20年追悼企画－

「ホピの予言 2004年版」上映会のお知らせ

今年は、チェルノブイリ20年になりますが、ランド・アンド・ライフにとりましても「ホピの予言」とともに歩み、20周年を迎える年となりました。今ここに至る私たちの20年間を振り返りつつ、さらに新たな気持ちで、ホピが私たちに語ってきた「質素で精神的な生き方こそが私たちに残された唯一の道である」という言葉の意味に向き合いたいと思っています。そして、私たち自身がホピ-平和に満ちた人々として生きたいと思います。ランド・アンド・ライフ20周年の今年のテーマは「スピリチュアリティとへいわ」です。どうぞ映像とお話にハートと耳を傾けに、ぜひお越しください。(ランド・アンド・ライフ／辰巳玲子)私たちの目前には、国家政策としてのプルサーマルの導入によるさらなる放射能の危険、憲法の改正による戦争参加への可能性など、同じ過ちを繰り返すのかそれとも新しい道を選ぶのかを決める大切な時に差しかかっています。そんな大切な今を、嘆きや恐れや無関心と共に過ごすことは「生きる可能性」を否定することにもつながります。仲間と集い、過去を見つめ現実を受け止め、そして核の惨事を繰り返すことのないように、誓いと祈りの時間を共に過ごす機会に出来ればと思います。

ミタクエオヤシン わたしにつながるすべてのいのちのために（平和のつどい／富田貴史）

■4月25日(火) 会場:トライバルアーツ内ブッダカフェ(TEL:052-848-3433) 参加費:2,000円

時間 18:30～ チェルノブイリへの祈り～映画製作者あいさつ・映画上映
20:30～ 河内カズさんトーク・交流会

■4月26日(水) 会場:this is it(TEL:052-262-0139) 参加費:2,000円(第一部、第二部ともに)

時間 第一部 13:00～ チェルノブイリへの祈り～映画製作者あいさつ・映画上映
15:00～ 中島哲演氏(福井県小浜市・明通寺住職)のお話

1.宗教者の立場から観た核 2.若狭に立つ13基の核施設と運動の歴史

第二部 19:00～ チェルノブイリへの祈り～映画製作者あいさつ・映画上映
21:00～ 映画制作者を囲んでの交流会(参加費別途1,000円※軽食付)

※交流会に参加を希望される方は、準備の都合がありますので事前にご予約ください。

問い合わせ:平和のつどい(富田貴史) 080-6947-2491/takafumitomita1320@yahoo.co.jp

—— チェルノブイリ原発事故の残したもの（その 4）——

2006 年 3 月 24 日は、日本の原発史上忘れられない日となるだろう。この日、金沢地裁は石川県志賀町の住民 132 人が 1999 年に起こした裁判の判決で、北陸電力の志賀原発が地震による事故で住民に重大な被害をもたらす現実的な危険性がある、として原発の運転を差し止める、とする判断を示した。1978 年の四国の伊方原発裁判の敗訴以来 33 年、各地の住民が度重なる敗訴を乗り越えて到達した画期的な判決である。地震国日本において原発が成り立つか、チェルノブイリの再来をもたらさないために速やかな脱原発への道を歩むべきではないだろうか。

差し止め判決とは

志賀原発は 1 号機が 1993 年に運転開始、この建設、運転をめぐって 1988 年に起こされた 1 次裁判では、1994 年に同じ金沢地裁で敗訴し、1998 年に最高裁判決で敗訴が確定した。今回の判決の対象となつた 2 号機は今年 3 月 15 日に運転を開始したばかりである。運転開始 10 日後に差し止め判決が出たことは、この間の原発と地震をめぐる状況の変化を示す。判決は、現在の原発の耐震構造がこれまで国が依拠してきた基準（1978 年策定）を上回る規模の地震が近年頻発していることを受け止め、そうした地震が起れば大事故が起こる具体的な危険性がある、と指摘し運転を差し止めるべきだとした。北陸電力は控訴し争うので、判決確定までは現状のまま運転が継続される、という危険な状態が続くことになる。この間に実際に事故が起つたら誰が責任をとるのか。東海地震が近いと言われる浜岡原発の裁判でも同様な判断ができる期待する。

世界で原発回帰の動き

チェルノブイリ以来加速してきた世界の脱原発が、近年、再び原発エネルギーに回帰する動きが出てきている。理由は二つある。中国を初めインドなど人口の多い国の経済が活発化し、エネルギー消費大国になりつつあること。石油の寿命はますます短くなり、石油の値段が高騰している。米国のイラク戦争は、今後地球規模で起こる石油争奪戦争の始まりである。石油に代わる新たな循環型エネルギーの開発

が行われる一方で、手っ取り早く原発に頼る動きである。しかし、前回も指摘した通り、原子力もまた地下資源に頼る以上寿命は短かく、こうした刹那的な対応は未来につながらない。第二の理由（というより原発推進のいい訳だが）は、世界の地球温暖化対策が遅々として進まないことである。アメリカを中心に日本のようなエネルギー多消費社会が炭酸ガス排出削減を行わないかぎり、開発途上の国々に説得力をもたない。だから原発へ、と言うのは危険な賭けである。

大事故の危険性は目の前に

判決の前日 23 日、福島第二原発で重大な事故につながる配管のひび割れが見つかった。沸騰水型原発では古くから重大事故につながると言わされてきた「再循環ポンプ」の直径 60 センチ、厚さ約 4 センチの配管の溶接部が全周にわたってひび割れていたのである。事前の超音波による検査で兆候が見つかりていたにも関わらず、東京電力は配管を交換しなかったという。これは国の基準も無視している。

同様のひび割れは、新潟県柏崎原発 1 号機でも見つかった。こうした安全性無視の意味はおのずと明らかである。小さな地震でも配管は破断し、炉心溶融の大事故につながる。不十分な耐震基準と安全無視の体質による運転が続く限りチェルノブイリの再来を覚悟しなければならない。20 年経ってもチェルノブイリの教訓を忘れてはならない。（河田）

<ナロジチ復興計画>

現地視察や調査・ホステージ基金からの情報などにより、ナロジチ地区は「ウクライナで最も悪性腫瘍やその他の疾病罹患率が高く、また児童を含む住民の死亡率も高い」ということをお知らせしてきました。その原因の一つには、同地域の土地がセシウム-137 やストロンチウム-90などの放射能で汚染され、キノコやベリー類・その他の野菜・肉類や乳製品など、その土地で収穫された食物には、現在も放射能を含み、それを摂取したことによる体内被曝であるといわれています。

次年度は、「事故処理作業者」や「チェルノブイリ障害者」への支援は継続しつつ、支援の重点を「ナロジチ地域の被災者救援」にシフトして、より支援を必要としている「チェルノブイリ被災者支援を強化しよう！」と考えました。ナロジチ地区の、放射能で汚染された土地に菜種を蒔けば、菜種の特性を生かした土壤改良ができます。そして、農作物の放射能を減少させ、体内被曝を防ぐことが期待できます。菜種を使った燃料で、トラクターも動き出します。

このような小さなきっかけから、現地の人々に希望を与え、人々が抱える問題の解決への糸口を見つけるためのモデル事業を提案することを目指したいと思います。

菜種燃料、実用化への挑戦！

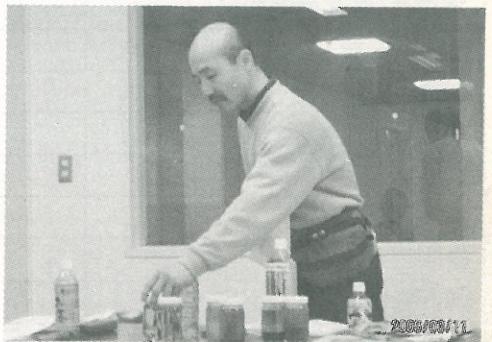
ナロジチでの可能性

長野県上伊那郡南箕輪村 原 富男

3月11日運営委員会終了後、「伊那谷菜の花楽舎」の関浩行さんを招いて菜種燃料についてお話を伺いました。関さんは現在、食用廃油からバイオディーゼル燃料を取りだして販売しています。廃食用油だけでなく「今年は菜種油から燃料を取り出す」とのこと。食用廃油か菜種かの違いはありますが、バイオディーゼル燃料（BDF）を取り出す方法自体は余り違いません。関さんの取り組みを教えてもらい、ナロジチで使えるものかを考えました。

ナロジチ地区の主産業は農業と林業ですが、生活を立て直すためには農林業を復興させなければなりません。現在、経済困難からトラクターの燃料を買えず、耕作可能面積の半分(600ha)が放置されています。また、汚染地の農作物では買い手がありません。そこで、休耕地に菜種を栽培し、バイオディーゼル燃料を抽出して、将来の地区産業にしてはどうかと考えました。ロシアとの天然ガス価格交渉に見られるように、ウクライナは自前のエネルギーを持っていません。今後、自前の燃料の創出が求められるでしょう。廃食用油に比べ、菜種から燃料を抽出することは、工程が短縮でき、品質も均一で良いものが出来ます。何よりも、菜は他の植物に比べ地中の放射能を多く吸着する性質があり（茎や種皮には吸着するが種には含まれない）、これを上手に使えば「燃料」と「放射能除去」が、一度に両方できることになります。また、集めた茎や葉は、メタンガスの材料として活用することも可能です。

フランスでは、ガソリンスタンドで売られる軽油中に5%のバイオ軽油が含まれ、ドイツ国内では1,000箇所のスタンドでバイオ軽油が販売されています。これを日本に当てはめれば、一つの市に1箇所のバイオスタンドがあることになります。因みに我が家（仕事用も含め）の車（ワゴン車二台・ダンプカー・掘削用重機）の全ては、廃食用油で動かしています。排気ガスの匂いが、少してんぷら油臭い（笑）のですが、それ以外は全く問題ありません。ナロジチで実際に使うことができるよう、関さんの協力のもと現地調査を進め、我々の技術を更に高めるように努力したいと思います。（関さん、お忙しい中ありがとうございました。）



<BDF の工程を説明する関さん>

事務局便り

前号で、上半期の会計報告に一部訂正があった旨、ご報告いたしましたが、下表に、その具体的な内容を記載いたします。（単位：円／上半期）

事業費	6,463,895	管理費	1,582,662
医療機関支援事業	2,620,250	役員報酬	0
医療機器メンテナンス事業	1,620,250	人件費	663,500
医薬品提供事業	1,000,000	通信・荷送費	83,745
保健事業費	1,200,000	印刷製本費	215,575
粉ミルク提供事業	1,200,000	旅費交通費	161,350
被災者団体等支援事業	1,200,000	会議費	12,750
外務省返還金	3,500	消耗什器備品費	33,948
評価事業	186,308	消耗品費	51,75
奨学金事業費	0	修繕費	17,952
派遣費(昨年度追加分)	80,178	事務所費	270,231
業務委託費	449,989	支払手数料	34,855
駐在員費	250,000	為替差損・両替手数料	0
輸送費	0	諸謝金	4,000
文通・クリスマスカード事業費	0	団体会費	33,000
海外監査費	0	雑費	0
機関紙発行費用	456,670	*斜太字の部分が訂正です。仕分け方に誤りがありました。収入・支出の総額に変更はありません。今後、費目仕分けの正確さを心掛けるよう留意いたします。	
国内監査費	7,000		
イベント参加費	10,000		
広告宣伝費	0		

お詫び：前号でご紹介したサレジオ小学校の記事（p5）の中で「4年生は、大道具・衣装・照明などの…」は、「5年生…」の誤りでした。訂正してお詫びします。

編集後記

- ☆インターネットで日本（世界）と繋がっているので、ウクライナに来ても距離を感じない。
- それを感じるのは、ウクライナ語・ロシア語の言葉が通じなくて情けない思いをする時。（京）
- ☆「（自衛隊）イラク経験 5人自殺」の小さな記事。アレクシエーヴィチ氏の著書「ボタン穴から見た戦争」は他国の惨事ではない…。帰国してもなお緊張は解けない。（美）
- ☆実家の隣家のデブで不細工でかわいい犬の大ちゃんが、今の私のお気に入り。思いっきり遊びたいのに、甥が私たちの間に立ちはだかる。まるでロミオとジュリエット。（佳）
- ☆事故直後、キエフ市の全住民（350万人）を疎開させる計画が、極秘裏に検討されていたという。20年目にして初めて明かされた真実。幸運にも、風向きが北へとそれたため、この計画は未遂に終わった。さて、風下では何が起こったか？ 北（モスクワ）へと向かった放射能は、人工的に作られた雨雲から、雨水と一緒に地方の都市に降り注いだのだ。（J）

〒456-0022 名古屋市熱田区波寄町 20-14
印刷「エープリント」
TEL・FAX (052) 871-9473